

## 関西学院大学 田村和彦教授講演会

### 閉ざされた身体／流れ出す身体——モデルネの身体イメージをめぐって

報告 西岡あかね

今年度から活動を開始した研究グループ「歴史的アヴァンギャルドの作品と芸術実践におけるジェンダーをめぐる言説と表象の研究」(科研・基盤B・19H01244 代表・西岡あかね)が主催者となって、総合文化研究所で講演会を行うのは、六月二十七日に開催したチエチリア・ベツロ氏(ローマ・ラ・サピエンツァ大学)の講演会に続き、今回が二度目です。

本研究グループでは、ドイツ語圏、イタリア、ロシアのアヴァンギャルド芸術、文学の中で、様々な形態を取りながら展開されたジェンダーイメージに光を当てようとしています。グループによるこれまでの研究活動では、アヴァンギャルドの女性性表象に若干重点が置かれていました。そこで今回は、男性性をめぐる表象に目を向けることとし、グループのメンバーでもあり、クラウス・テーヴェライトの記念碑的著書『男たちの妄想』の翻訳者としても知られる関西学院大学の田村和彦教授を講師にお迎えして、主にドイツ語圏を中心にモデルネの身体イメージと男性性表象との関わりについてお話をいただきました。

講演ではまず、前近代における、「多孔質」で外界に対して開かれた「膜」としての皮膚のイメージが、近代においては、衛生学的意識の高まりと並行する形で、外部から身体をへだて

る「鎧」のような閉鎖的イメージに変化したことが指摘されました。この結果生まれた、密閉的で堅牢なシステムとしての身体イメージが、規範的な男性性のイメージと結びついていくのですが、十九世紀末以降、この身体イメージが、群衆体験や衛生学、あるいは性科学の発達などによって徐々に脅かされてゆきます。モデルネの文学や芸術、あるいは医学や衛生学などの諸分野では、病や性的欲望、病原菌など、内外からの「敵」の侵入によって「液状化」し、外部との境界線を失ってゆく身体の姿が恐怖や不安とともに繰り返して語られています。一方で、モダンダンスや新しく誕生した海辺のリゾート体験などを通じて、解放され、外界へと「開かれた身体」というポジティブなイメージも形成されてゆきます。こうしたモデルネの多彩な身体表象を概観し、田村氏は、モデルネは「身体の闘争と混和の場」であったと結論付けています。本講演で指摘された、モデルネの両極的な身体表象のあり方と、その両者の複雑な絡み合いは、アヴァンギャルド芸術、文学における身体イメージやジェンダー表象を分析する際にも重要な視座を提供してくれるもので、本グループにおける今後の研究でも、この点はさらに追及してゆく必要があります。

講演に引き続き、本学国際社会学部所属でドイツ近現代史が

専門の小野寺拓也さんに、歴史学者の立場からのコメントをお願いしました。小野寺さんからは、近年ますます盛んになりつつある(ように見える)男性史研究が抱える問題点を指摘していただき、現状を踏まえた上で、本当に「おもしろい」男性史研究を実現させるには、今後どのような研究視点が必要になるか、田村氏の講演の中でも言及のあったテーヴェライトの研究や、会場との議論も踏まえながらいくつかの提言を行ってもらいました。現状、人文学研究における男性性研究は、コンネルの「ヘゲモニアルな男性性」の理論などを踏まえて、あらかじめ批判のターゲットとなる男性性表象を想定したうえで論を進めるという「型」にはまってしまう傾向があります。しかし、田村氏の講演でも明らかにした様に、男性性のイメージは、その現れにおいても、その生きられた経験の相においても多彩であることに、今後の研究ではもつと目が向けられてゆくべきでしょう。そのためにも、男性史研究の流れを批判的に検討してゆく作業は必須であり、今回の小野寺さんの発表は、今後のグループの研究にとっても貴重な機会となりました。

日時…二〇一九年九月二十七日(金)

場所…研究講義棟四階 四二二教室

講師…田村和彦(関西学院大学)

コメンテーター…

小野寺拓也(東京外国語大学)